

# 母親が捉えた子どもの時間意識と母親自身の時間意識との関連

—子どもが育つ時間的環境についての—考察—

岡野雅子 生活科学教育講座

キーワード, 幼児, 保育環境, 子どもの時間意識, 母親の時間意識

## 1. 問題と目的

子どもは生活のなかで日々育つ。今日の生活環境は、子どもの発達にとっていかなる影響を及ぼしているのだろうか。

現代社会がもつ特徴の一つとして、“切り刻まれた時間”や“外的な時間からの圧力”などの時間的側面が挙げられる。現代に生きている我々にとって、時間はゆったりと流れているときばかりではなく、一瞬一瞬がバラバラに在り、時々刻々の慌ただしい変化の中に我が身を置いているように感じるときもある。その時間の流れ方はいわば、アナログ的ではなく、デジタル的であるといえる。そして、速いことは価値のあることであり善いこととして、我々は絶えず時間に追われて、急かされている感覚のなかで暮らしている。この外的な時間の圧力は、今日の社会の効率優先と関連しているといえるだろう。

このような現代の生活環境のなかの時間は、子どもが生きている世界のなかの時間とどのような関係にあるのだろうか。現代社会の時間的環境は、そこで育つ子どもにとって、どのような意味を持ち、どのような影響を及ぼしているのだろうか。

エルキンド<sup>1)</sup>は、現代の子どもたちは、速く、そして早く、成長するように急かされていると指摘している。外的な時間の圧力を受けてストレスにさらされた子どもは、無気力感を獲得して発達が歪められてしまう危険性があることを指摘し、その原動因として、親、学校、マスコミ媒体を挙げている。

子どもがいきいきと生きている世界においては、子ども自身が主管であり主人公である<sup>2)</sup>。そこに流れている時間(内的な時間)は、子ども自身によって律せられているものであり、決して他者によって律せられるものではない。それは、ある時は速く過ぎ去り、ある時にはゆっくりと過ぎていくかもしれない。また、一瞬の体験が大きな感動を伴って子どものこころに深く留まり、永遠の意味を持つものとなることもあるだろう。それを時計で計ればほんの一瞬であったとしても、子どもにとっては遙かに広く深い時間として受け止められることだろう。

子どもは環境との相互作用を通して発達するが、なかでも人的環境は子どもの発達に最も重要な影響を及ぼしている。それゆえ、子どもを育てる者が子どもの世界をどのように捉えているかは、それ自体が子どもにとってはまさに環境を構成する一部となるものといえる。したがって、現代社会のなかで育つ子どもという枠組みを指摘したが、その現代社会とは、具体的実際的には子どもの最も身近な存在である父親や母親を通して具現化されるところのものであるということができよう。

翻って、外的な時間の圧力の特徴を持つ現代社会のなかで子どもを育てることは、子ども自身の世界を尊重すればするほど、父親・母親などの育てる側の者が社会から取り残される不安に襲われるであろうことは、容易に理解できることである。したがって、父親・母親をはじめ保育にかかわる者(保育者)にとって「子どもの世界に対する共感」と「現代社会の効率性への適応」との間には相克

があるのではないだろうか。このことは、保育者が子どもの生きている世界のなかに流れている時間を尊重し、子どもの在るがままを受け入れる姿勢を持ちたいと望むとき、すなわち、子どもにとってより良い保育者であろうとするとき、一層深刻な問題となると考えられる。それゆえ、それは保育者にとって保育のありようと深くかかわる問題となる。またそれは、現代社会における子育ての困難さを形成する要因の一つであるということができよう。

このような問題意識のもとに、育てられる側の子どもが生きる世界の時間を、育てる側の母親の時間意識と関連させて検討を試みるのが、本研究の目的である。それにより、現代社会という枠組みのなかで育つ子どもにとってのより良い保育の創造を考える一助としたい。

近年、時間意識に関連して、タイプA行動特性が注目されている。それは、冠動脈性心臓疾患の危険因子の一つとして指摘され、一般的特性として①時間切迫と焦燥、②攻撃と敵意、③競争性を伴った達成努力の3つの下位特性が見いだされている<sup>3)</sup>。そして、タイプA行動特性が生まれ始めるのは幼児期の頃であるという。その特性が生まれる前の予防、あるいは生まれて間もない頃の矯正の観点から、子どもを対象とした測定法として米国ではMYTH (Matthews Youth Test for Health) があり、その日本語版幼児用タイプA検査の作成も試みられている<sup>4)</sup>。また、甲本<sup>5)</sup>は大学生を対象に時間的態度に関する調査を行い、時間不安、将来展望、時間活用、時間観の4つの因子を見いだしている。本研究では時間意識の一側面である時間不安を手がかりとして、子どもと母親の時間意識を捉えることにした。

## 2. 方法

### (1) 調査方法と手続き

群馬県内私立G幼稚園年長組(132名)および年少組(118名)に在籍する園児250名の母親を対象として、各クラスの担任教諭を通して調査質問紙を園児に持ち帰らせ、後日園児を通して回収した。年長組109名、年少組103名の計212名から回収した(回収率は84.8%)。

### (2) 調査項目

調査項目は、①子どもの習い事、②母親が捉えた子どもの時間意識、③母親自身の時間意識、④母親の子ども観・保育観である。

具体的な内容は以下の通りである。①子どもの生活の忙しさを測る指標として習い事を取り上げ、「幼稚園以外に習い事や学習をしていますか?」と尋ね、「何を」「週何日」行っているかについて回答を求めた。②母親が捉えた子どもの時間意識および③母親自身の時間意識については、甲村の先行研究<sup>6)</sup>を参考にして、「時間をいつも気にしている」「何をするにもせっかちである」「人に待たされるとすぐにイライラする」「のんびり屋である(逆転項目)」「生活は時間に追われているようだ」の時間不安に関する5項目をとりあげた。④母親の子ども観・保育観については、子どもの忙しさや時間意識と関連する側面についての項目を作成した。すなわち、子どもの生活についての捉え方についての項目(「いまの子どもは自分の子どもの頃と比べて忙しいと思う」「いまの子どもはしなければならないことが多くて、かわいそうだ」)、子どもとのかかわりについての項目(「子どもが何かをするときは、子どものペースを尊重したいと思う」「子どもとつき合っているときは、ゆったりとした気分になれる」「子どもに『早くしなさい』とつい言うってしまう方だ」「子どもがモタモタしているとついイライラしてしまう」「子どもをつい急かせてしまって、その後で自分を嫌になることがある」「子どものテンポと自分のテンポがズレていると感じることが多い」)、子どもの将来像についての項目(「私は子どもの将来の姿を想像して楽しむことが多い」)の計9項目である。

回答方法は①を除く②③④は選択肢による択一法で、「その通りである」から「まったく違う」までの4件法である。

分析は、統計解析ソフトSPSSを用いた。

### (3) 調査対象者

調査対象者である幼稚園児の母親の属性等は表1の通りである。

### (4) 調査時期

平成8年11月～12月である。

表1 調査対象者（幼稚園児の母親）の属性等

年齢	25-29歳：27(12.7%)、30-34歳：106(50%)、35-39歳：71(33.5%)、40歳-：7(3.3%)、無回答：1(0.5%)
就労状況	なし：141(66.5%)、パート：47(22.2%)、専任職：18(8.5%)、無回答：6(2.8%)
子どもの性	男児：96(45.3%)、女児：116(54.7%)
子どもの年齢	年長児：109(51.4%)、年少児：103(48.6%)
子どものきょうだい数	1人：28(13.2%)、2人：121(57.1%)、3人：62(29.2%)、4人：1(0.5%)
子どもの出生順位	第1子：114(53.8%)、第2子：74(34.9%)、第3子：23(10.8%)、無回答：1(0.5%)
家族形態	核家族：157(74.1%)、拡大家族：55(25.9%)

## 3. 結果と考察

### (1) 子どもの習い事

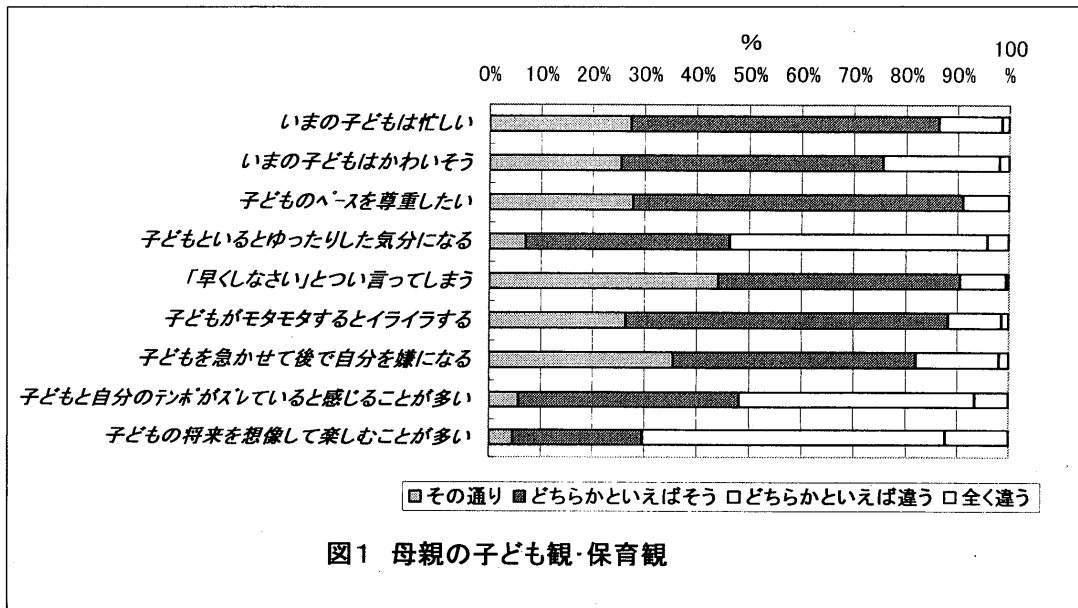
表2 子どもの習い事の数および頻度

していない		99人(46.7%)
している		113人(53.3%)
習い事の数	1つ	63人(29.7%)
	2つ	36人(17%)
	3つ	14人(6.6%)
習い事の頻度	週1日	53人(25%)
	2日	35人(16.5%)
	3日	23人(10.8%)
	不明	2人(0.9%)

子どもの生活の忙しさを測る指標として習い事を尋ねたところ、過半数の子ども(53.3%)が水泳・ピアノ・学習塾・体操教室・絵画などをしており、23.6%の子どもは2つ以上をしていた。その頻度は週1回が最も多い(25%)が、週2回、3回の子どものも少なくない(表2)。したがって、就学前幼児の生活において、幼稚園通園以外に習い事を行うことは、ルーチン活動の一部として位置付けられている場合が多いといえるだろう。

### (2) 母親の子ども観・保育観

図1に示すように、母親の子ども観・保育観についての項目は、「いまの子どもは自分の子どもの頃と比べて忙しいと思う」に対して「その通り」と「どちらかといえばそう」を合わせた回答は86.4%であり、「いまの子どもはしなければならぬことが多くて、かわいそうだ」は75.5%である。したがって、多くの母親は子どもの生活を忙しくてかわいそうと捉えている。



子どもとのかかわりについての項目である「子どもが何かをするときは、子どものペースを尊重したいと思う」に対して91%の母親が「その通り」「どちらかといえばそう」と回答し、大多数を占めている。しかし一方で「子どもに『早くしなさい』とつい言ってしまう方だ」に対しても肯定的回答が90.5%と多数を占めている。したがって、ほとんどの母親は、子どものペースを尊重したいと思いつつも、実際には「早くしなさい」と急かせていることがわかる。「子どもがモタモタしている」とついイライラしてしまう」「子どもをつい急かせてしまって、その後で自分を嫌になることがある」も8割以上の母親が肯定的回答である。「子どものテンポと自分のテンポがズレていると感じることが多い」と「子どもとつき合っているときは、ゆったりとした気分になれる」は約半数の母親が肯定している。「私は子どもの将来の姿を想像して楽しむことが多い」の項目を肯定する母親は3割にすぎない。

### (3) 子どもの時間意識と母親の時間意識の関係

時間不安に関する5項目について、子ども群と母親群を比較すると図2のようである。いずれの項目も2群間に有意差が認められた（「時間を気にする」 $\chi^2(3)=168.41, p<0.001$ 、「せっかち」 $\chi^2(3)=84.2543, p<0.001$ 、「待たされるとイライラする」 $\chi^2(3)=79.291, p<0.001$ 、「のんびり屋」 $\chi^2(3)=18.281, p<0.001$ 、「時間に追われている」 $\chi^2(3)=140.07, p<0.001$ ）。したがって、母親群の方が子ども群よりも時間不安が強いことがわかる。母親群は「何をするにもせっかちである」に対して「その通り」と「どちらかといえばそう」を合わせた回答が46.1%であり、「人に待たされるとすぐにイライラする」「生活は時間に追われているようだ」は過半数を占めている（55.8%、53.8%）。「のんびり屋である」を否定する者は61.4%で、「時間をいつも気にしている」を肯定する者は71.9%に達する。一方、子どもの時間意識は「待たされるとイライラする」19.5%、「のんびり屋ではない」42.9%、「せっかち」14.8%、「時間を気にする」12.4%で、「時間に追われている」は6.7%にすぎない。

時間不安の5項目の各回答について「その通り」1点から「まったくちがう」4点として得点化して、時間不安得点として集計したところ（逆転項目「のんびり屋である」は逆に得点化した。低得点ほど時間不安が強いことを表す。）、子ども群は7～20点に分布し平均15.7点（S.D.=2.4）で、母親群は5～19点に分布し平均11.8点（S.D.=2.7）であった（図3、図4）。そこで、子ども群・母親群と

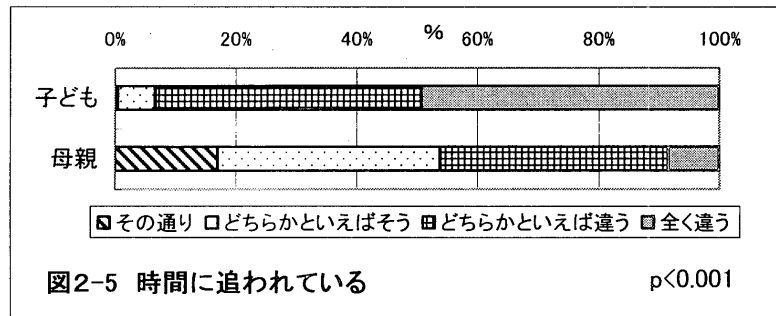
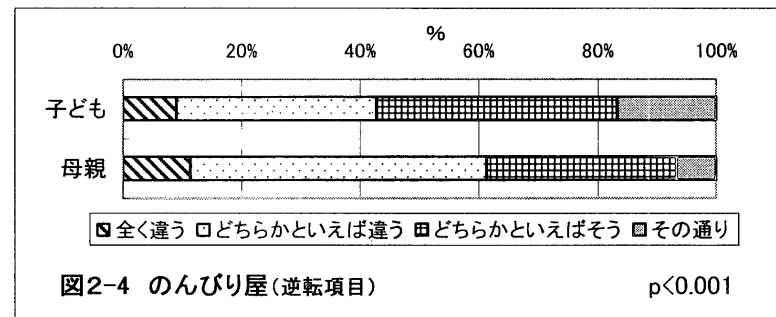
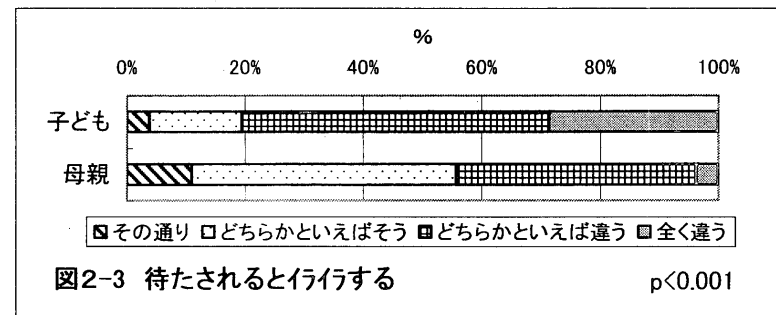
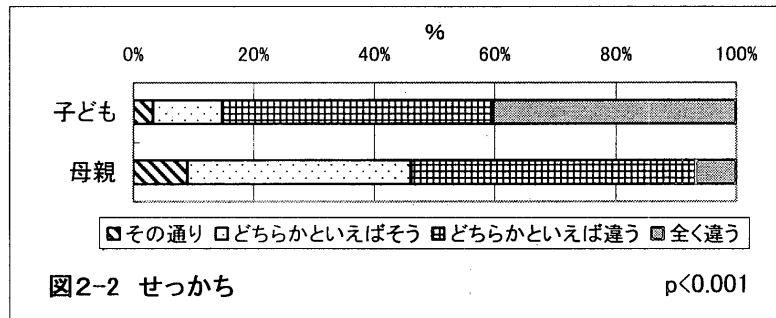
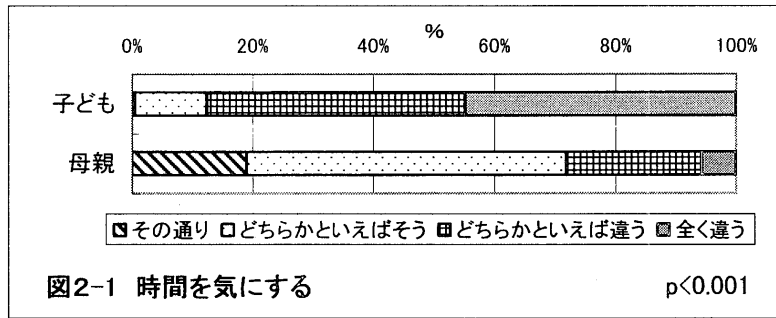
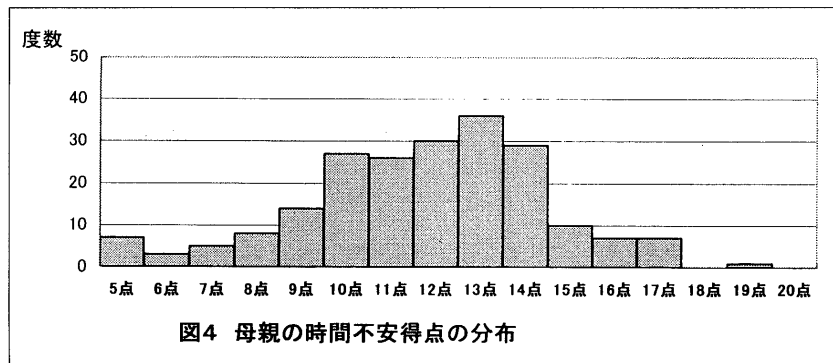
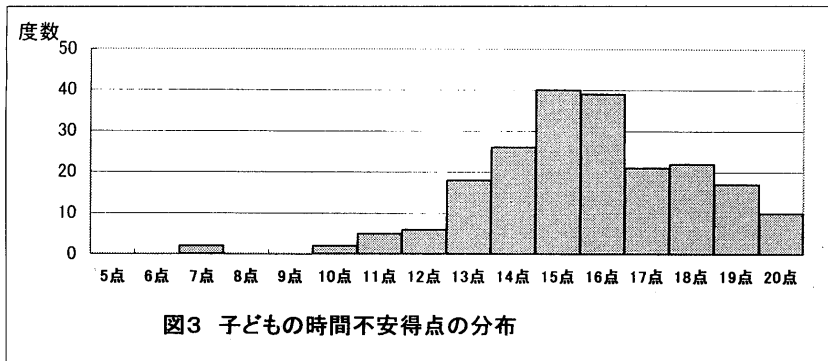


図2 子どもの時間意識と母親の時間意識の比較



もに平均点± S.D.を求め、それに近似した整数により 3 群に分けた。子ども群は、時間不安得点 7～13 点を時間不安「強」群 (n=33, 15.9%), 14～18 点を時間不安「中」群 (n=148, 71.2%), 19～20 点を時間不安「弱」群 (n=27, 13%) とし、母親群は、時間不安得点 5～9 点を時間不安「強」群 (n=37, 17.6%), 10～14 点を時間不安「中」群 (n=148, 70.5%), 15～19 点を時間不安「弱」群 (n=25, 11.9%) とした。子どもの時間不安の 3 群と母親の時間不安の 3 群の関係は図 5 の通りであり、両群間に相関が認められた ( $r=.225, \chi^2(4)=18.249, p<0.001$ )。

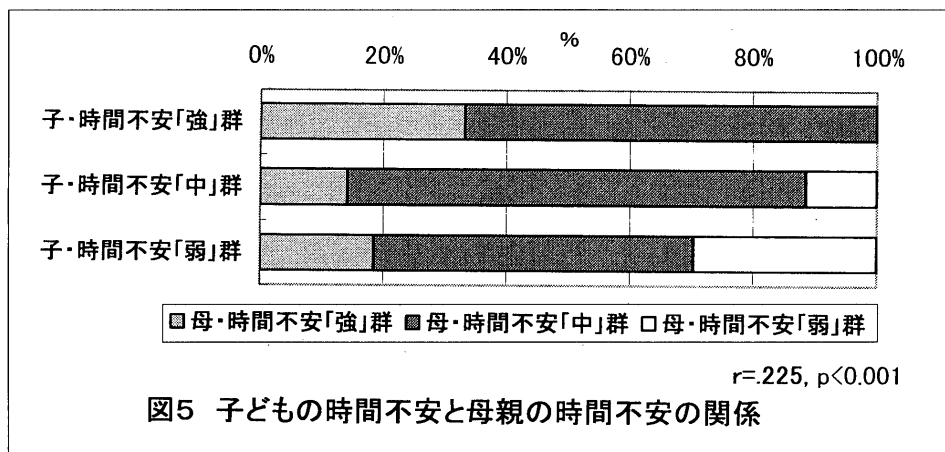


表3 子どもの時間不安と母親の時間不安についてのクロス集計の漸近有意確率

項目	子どもの時間不安(3群)	母親の時間不安(3群)
母親の年齢(4群)	.357, $\chi^2(6)=6.625$	.231, $\chi^2(6)=8.099$
母親の就労状況(3群)	.319, $\chi^2(4)=4.707$	.161, $\chi^2(4)=6.563$
子どもの性(2群)	.624, $\chi^2(2)=0.944$	.855, $\chi^2(2)=0.314$
子どもの年齢(2群)	.495, $\chi^2(2)=1.405$	.471, $\chi^2(2)=1.505$
きょうだい数(3群)	.896, $\chi^2(4)=1.088$	.135, $\chi^2(4)=7.026$
出生順位(3群)	.303, $\chi^2(4)=4.854$	.166, $\chi^2(4)=6.487$
家族形態(2群)	.254, $\chi^2(2)=2.738$	.051 <sup>△</sup> , $\chi^2(2)=5.976$
習い事の数(4群)	.956, $\chi^2(6)=1.547$	.364, $\chi^2(6)=6.550$
習い事の頻度(4群)	.836, $\chi^2(6)=2.783$	.221, $\chi^2(6)=8.247$
母親の子ども観・保育観	いまの子どもは自分の子どもの頃と比べて忙しいと思う n, 平均ランク 子・時間不安強群 33 107.61 子・時間不安中群 148 103.64 子・時間不安弱群 27 105.41 .922 $\chi^2(2)=.162$	n, 平均ランク 母・時間不安強群 37 102.73 母・時間不安中群 148 105.47 母・時間不安弱群 25 109.78 .878 $\chi^2(2)=.260$
	いまの子どもはしなげなければならないことが多くて、かわいそうだ n, 平均ランク 子・時間不安強群 33 103.64 子・時間不安中群 148 105.34 子・時間不安弱群 27 100.94 .926 $\chi^2(2)=.154$	n, 平均ランク 母・時間不安強群 37 100.99 母・時間不安中群 148 107.15 母・時間不安弱群 25 102.44 .801 $\chi^2(2)=.444$
	子どもが何かをするときには、子どものペースを尊重したいと思う n, 平均ランク 子・時間不安強群 33 102.67 子・時間不安中群 148 102.90 子・時間不安弱群 27 115.52 .484 $\chi^2(2)=.145$	n, 平均ランク 母・時間不安強群 37 110.51 母・時間不安中群 148 105.60 母・時間不安弱群 25 97.48 .622 $\chi^2(2)=.950$
	子どもとつき合っているときは、ゆったりした気分になれる n, 平均ランク 子・時間不安強群 33 112.68 子・時間不安中群 148 102.68 子・時間不安弱群 27 104.46 .635 $\chi^2(2)=.908$	n, 平均ランク 母・時間不安強群 37 136.14 母・時間不安中群 148 102.36 母・時間不安弱群 25 78.72 .000 *** $\chi^2(2)=17.874$
	子どもがモタモタしているといらいライしてしまう n, 平均ランク 子・時間不安強群 33 93.88 子・時間不安中群 148 104.50 子・時間不安弱群 27 117.48 .219 $\chi^2(2)=3.038$	n, 平均ランク 母・時間不安強群 37 77.58 母・時間不安中群 148 109.13 母・時間不安弱群 25 125.32 .001 ** $\chi^2(2)=14.702$
	子どもに「早くしなさい」とつい言うてしまう方だ n, 平均ランク 子・時間不安強群 32 92.36 子・時間不安中群 148 108.95 子・時間不安弱群 27 90.65 .112 $\chi^2(2)=4.371$	n, 平均ランク 母・時間不安強群 37 76.65 母・時間不安中群 148 108.47 母・時間不安弱群 25 126.54 .001 ** $\chi^2(2)=14.477$
	子どもをつい急かせてしまっって、その後で自分を嫌になることがある n, 平均ランク 子・時間不安強群 33 90.77 子・時間不安中群 148 106.91 子・時間不安弱群 26 104.21 .317 $\chi^2(2)=2.296$	n, 平均ランク 母・時間不安強群 37 76.24 母・時間不安中群 148 108.40 母・時間不安弱群 25 127.58 .001 ** $\chi^2(2)=14.465$
	子どものテンポと自分のテンポがズレていると感じることが多い n, 平均ランク 子・時間不安強群 33 87.42 子・時間不安中群 148 110.32 子・時間不安弱群 27 93.32 .051 <sup>△</sup> $\chi^2(2)=5.954$	n, 平均ランク 母・時間不安強群 37 77.20 母・時間不安中群 148 107.16 母・時間不安弱群 25 137.58 .000 *** $\chi^2(2)=18.169$
	私は子どもの将来の姿を想像して楽しむことが多い n, 平均ランク 子・時間不安強群 33 92.83 子・時間不安中群 148 106.45 子・時間不安弱群 27 108.06 .390 $\chi^2(2)=1.1885$	n, 平均ランク 母・時間不安強群 37 113.91 母・時間不安中群 148 99.96 母・時間不安弱群 25 125.86 .049 * $\chi^2(2)=6.001$

注) 「きょうだい数」は、1人,2人,3-4人の3群とした。  
「習い事の数」は、0,1つ,2つ,3つの4群とした。  
「習い事の頻度」は、0,週1日,2日,3日の4群とした。

\*\*\* p<0.001  
\*\* p<0.01  
\* p<0.05  
△ p<0.1

子どもの時間不安（3群）および母親の時間不安（3群）のそれぞれについて、対象者の属性や習い事、母親の子ども観・保育観とのクロス集計を行った。対象者の属性や習い事については、 $\chi^2$ 検定を行い、母親の子ども観・保育観についてはノンパラメトリック検定のKruskal Wallis検定を行った。その結果、それぞれの漸近有意確率は表3のようであった。ほとんどの項目で、子どもの時間不安との関連よりも母親の時間不安との関連の方が相対的に強いことがわかる。

子どもの時間不安については、統計的有意差に至る項目は認められない。しかし、母親の「子どものテンポと自分のテンポがズレていると感じることが多い」とは関連する傾向が見いだされた（ $p < 0.06$ ）。残差を分析したところ、「その通り」の回答は子どもの時間不安「弱」群に多く、「どちらかといえばそう」の回答は子どもの時間不安「強」群に多かった。また、「子どもに『早くしなさい』とつい言うてしまう方だ」も統計的有意差には至らないものの若干関連する傾向が見いだされた（ $p < 0.12$ ）。しかし、その他の項目については、子どもの時間不安との関連は認められない。

一方、母親の時間不安は、「子どもとつき合っているときは、ゆったりとした気分になれる」「子どもがモタモタしているといらいらいしてしまう」「子どもに『早くしなさい』とつい言うてしまう方だ」「子どもをつい急かせてしまって、その後で自分を嫌になることがある」「子どものテンポと自分のテンポがズレていると感じることが多い」「私は子どもの将来の姿を想像して楽しむことが多い」との間に統計的有意差が認められ（ $p < 0.001 \sim p < 0.05$ ）、関連が深い。また、拡大家族の場合には時間不安「強」群が多い傾向がある（ $p < 0.06$ ）。その他の項目との間には関連は認められない。

#### (4) 考察

図3と図4の比較から子どもの時間不安は母親の時間不安と比べると弱いことが明らかとなったが、両群の間には相関が認められた（図5）。したがって、母親の時間不安が強い場合には子どもの時間不安も強く、母親の時間不安が弱い場合には子どもの時間不安も弱いといえる。

近年の子どもの生活スタイルは、習い事の普及などにより忙しさが増しているとしばしば言及されるが、本結果からは、それは子どもの時間不安に対して影響を及ぼすものではないようである（表3）。母親の年齢や就労状況、子どもの性、年齢（年長児と年少児）、きょうだい数、出生順位、家族形態も同様に子どもの時間不安との関連は見いだせない（表3）。母親の子ども観・保育観の一項目である「子どものテンポと自分のテンポがズレていると感じることが多い」の回答とはやや関連する傾向があるが、しかし、それを詳細に検討するとその関連の様相は若干複雑である。つまり、子どもの時間不安「強」群の母親は「どちらかといえばそう」の回答が多く、「その通り」の回答はむしろ子どもの時間不安「弱」群の母親に多い。この結果の意味するところは以下のように考えられる。すなわち、母親が、現代社会に適応して生活している自分のテンポと子ども自身が主管である世界に流れているテンポとの間にズレがあると感じ取ることと、それゆえに母親がイライラしたり子どもを急かせたりすることとは別である、ということではないだろうか。むしろ、子どもの時間不安「弱」群の母親の場合には、子どもの世界に寄り添い共感しようとする姿勢を持つとき、母親は自分と子どもとのズレを強く感じるようになるのではないだろうか。

一方、母親の時間不安と関連の深い項目をみると、子どもとのかかわり方に関する5項目と子どもの将来像に関する項目の、「子どもとつき合っているときは、ゆったりとした気分になれる」「子どもがモタモタしているといらいらいしてしまう」「子どもに『早くしなさい』とつい言うてしまう方だ」「子どもをつい急かせてしまって、その後で自分を嫌になることがある」「子どものテンポと自分のテンポがズレていると感じることが多い」「私は子どもの将来の姿を想像して楽しむことが多い」であった。



以上の結果から、子どもの時間意識は、母親の就労状況やきょうだい数よりも、むしろ母親の時間意識のありようが強く関連しているといえる。すなわち、母親の時間不安の強弱の程度が、子どもへのかかわり方を規定することになり、そして、子どもが生きている世界に流れる内的な時間を共有してゆったりと楽しむことが少なく、つい子どもを急かせるという行動をとる母親の場合には、子どもの時間不安は増大する、という関連が見いだされるといえるだろう。

幼児期の子どもを育てている母親は、その多くが「子どものペースを尊重したい」と望みながらも、しかし、子どものテンポを共有して「ゆったりとした気分になれる」母親は多くはない。時間展望を広げて「子どもの将来の姿を想像して楽しむ」母親はさらに少ない。現代社会の効率性への適応を迫られて、母親たちは「つい早くしなさいと言ってしまう」という。このようなジレンマは、家庭の外に仕事を持つ母親の方がより強いのではないかと予測されるが、しかし本結果の示すところは、母親の就労状況との関連に有意差は見いだせない。したがって、家庭の外に仕事を持たない母親の場合でも、子どもの世界に対する共感と現代社会の効率性への適応の狭間にいるといえよう。

子どもが存分に自分自身の世界を生きることは、幼児期の発達にとって望ましい。しかし、時間不安の強い子どもの場合には、自分自身が主管であるべき時間意識は外的な時間の圧力により圧迫されて、脇へ追いやられてしまうことになる。

エルキンドは、現代の子どもたちは急かされていることを1981年発行の著書（訳書は1983年発行）で指摘したが、近著において、その後の20年間に子どもを急かせる圧力はさらに強くなり、複雑化していると述べている<sup>6)</sup>。

子どもの生きている内面を尊重し、自己が主管であるその世界を存分に生きることができるよう子どもの環境を整えることは、より良い保育を創り出していくうえで必須の事項である。それゆえ、保育に携わる者は、外的な時間の圧力が子どもの生きる世界を脅かすことのないように子どもを守る役割を担っている。

したがって、子どもの身近にいて子どもと関わる者はその役割を自覚して、外的な時間の圧力に流されることなく自分の内的な時間とのバランスを保つことにより、時間不安を軽減するように努めることが肝要であるといえよう。また、子どもとのかかわりは、子どもの世界をゆったりと楽しみ、子どもを急かすことは控える、などの態度が望まれよう。

本研究の子どもの時間意識に関する資料収集は、母親の回答に拠っており、母親が捉えた子どもの時間意識という間接的資料である。今後は、子どもの遊び場面の観察や子どもとの面接などにより、子ども自身の時間意識を直接すくいあげる方法を検討する余地があるだろう。また、今回は母親の時間意識と関連させて考察を試みたが、今日の生活環境の中で育つ子どもにとって外的な時間の圧力はその他にもさまざまなものが考えられる。子どもの健全な発達のための環境を整える命題に向けて、さらに探求が必要であり、今後の課題としたい。

#### 4. 要約

現代社会に生活する我々は、外的な時間の圧力を受けて時間に追われる感覚のなかで暮らしている。しかし、子どもがいきいきと生きている世界に流れる時間（内的な時間）は、子どもが主管であり子ども自身により律せられるものである。子どもの健全な発達に向けて生活環境を整えることは重要な課題であることから、本研究は、幼稚園児の母親を対象として調査を行い、子どもの忙しさの実態と子どもの時間意識を母親を通して捉え、それは母親の時間感覚とどのように関連しているのかの観点から探った。

- (1) 子どもの生活の多忙さの指標として習い事について尋ねたところ、過半数の子どもが水泳・ピアノなどを行い、約 1/4 は 2 つ以上を行っていた。頻度は週 1 回が多いが週 2 回以上も 27% いた。
- (2) 子どもの生活について、8 割前後の母親はいまの子どもは忙しくてかわいそうだと捉え、9 割の母親が子どものペースを尊重したいとしながらも、実際には「早くしなさい」とつい言うてしまうとしている。
- (3) 外的な時間の圧力を受けて時間不安を感じる程度は、母親の方が子どもに比べてはるかに強く、また、子どもの時間不安と母親の時間不安の間には相関が認められた。
- (4) 子どもの時間不安は、習い事の数や頻度、母親の年齢や就労状況、きょうだい数、出生順位、家族形態などとの関連は認められず、母親の「子どものテンポと自分のテンポがズレていると感じることが多い」と関連する傾向がある。すなわち、時間不安が強い子どもの母親は「どちらかというところ」と回答し、時間不安が弱い子どもの母親は「その通り」と回答する傾向があった。
- (5) 時間不安の強い母親の子どもとのかかわりは、子どもがモタモタするとイライラし、「早くしなさい」とつい言うてしまい、子どもといるとゆったりした気分になることは少ない。
- (6) これらの結果から、子どもの時間意識は習い事による多忙さよりも、母親の時間意識のありようと若干の関連があるといえよう。今日的生活環境に適応して暮らす母親は子どもに比べて時間不安が強いが、子どものテンポと自分のテンポのズレを感じながらも、しかし、それでイライラしたり子どもを急かせたりするのではなく、むしろ子どもの世界に寄り添い、子どもの生きている世界をともにゆったりと楽しむ姿勢をもつ場合には、子どもの時間不安は強くはならないことが示唆された。

#### 引用文献

- 1) D.エルキンド (久米稔他訳) : 『急かされる子どもたち』, 家政教育社, 東京, (1983)
- 2) 岡野雅子 : “第 4 章子どもの生活とその発達, 1 子どもの遊びと時間”, 金田利子他編『生活者としての人間発達』, 家政教育社, 東京, 107-131 (1995)
- 3) Matthews, K.A., & Volkin, J.I. : Efforts to excel and the Type A behavior pattern in children. *Child Development*, 52, 1283-1289 (1981)
- 4) 山崎勝之・菊野春雄 : 日本語版幼児用 TypeA 検査 (MYTH) の作成, 心理学研究, 61, 155-161 (1990)
- 5) 甲村和三 : “第 8 章現代社会における時間と焦燥, 第 2 節時間に対する態度と性格”, 松田文子他編『心理的時間』, 北大路書房, 京都, 455-472 (1996)
- 6) David Elkind : *The Hurried Child (Third Edition)*, Perseus Publishing, Massachusetts, (2001)

(2004年5月25日 受理)